

《書 評》

R. マックファーサー他編、徳田教之他訳

『毛沢東の秘められた講話』上・下

(岩波書店)

(静岡県立大学) 毛里 和子

ぶつつけ本番の毛沢東

(一)

1970年代初めに、『毛沢東思想万歳』を目にした時、そしてそれを東大近代中国史研究会の丹念な翻訳で読んだ時、現代中国を研究しているものすべてが大きな衝撃を受けた。手を入れられ、きちんと編集し直された毛沢東の論文や演説で現代中国のイメージを作ってきたものには、傲慢で、粗野で、不遜な毛沢東、そして唯々諾々と毛沢東の弁舌に従っているリーダーや活動家たちの赤裸々な姿は驚嘆の一語に尽きたのである。

最近翻訳された『毛沢東の秘められた講話』(原題は、The Secret Speeches of Chairman Mao—From the Hundred Flowers to the Great Leap Forward, Harvard Contemporary China Series:6, 1989)も20年前に勝るとも劣らない衝撃を読むものに与える。本書では、1957年から58年という現代中国の一番大事な分岐点において、思いつくままにしゃべりまくり、スチュアート・シュラムが言う「ぶつつけ本番の毛沢東」をそのまま伝えてくれるからである。本書に収録された19点(訳者が付録としてつけた2点を含めれば21点)の講話その他の毛沢東の肉声(編集者の資料考証によれば、ほとんどは毛沢東の講話の録音テープを起こしたものらしい)は、ただ一点(1957年3月「周恩来などの同志への手紙」)以外、すべて「本邦初公開」の貴重な文献である。

1989年からほぼ毎年1冊ずつ刊行されている『建国以来毛沢東文稿』(中共中央文献研究室編、中央文献出版社、第7冊<一九五八年>まで刊行

された)も、これまで知られなかった毛沢東の実像を新資料で伝えてくれるが、文章になったものに限定され、しかも微妙なものは注意深く落とされているために、本書にある毛の肉声は何も入っていない。したがって本書の価値はきわめて大きいのである。

(二)

本書のなり立ちを紹介しよう。上巻には、1957年2月から4月末の毛沢東の講話など14点、それに訳者が添付した57年7月の青島会議での毛の談話と説明2点が収録されている。さらにR. マックファーサーの解説「毛主席の秘められた講話」、ユージン・ウーの解説「現代中国の研究—情報源の問題」が入っている。

下巻には、58年1月(杭州会議)から11月(武昌会議)までの毛沢東の肉声が5点、三つのエッセイ(B. I. シュウォルツ「晩年の毛沢東についての論考」、M. ゴールドマン「文学と知識分子の政治的役割についての毛沢東の執念」、T. チーク「原典に即して語れば」)、さらに訳者が作った毛沢東の著作年表(34~68年)が入っている。

ではマックファーサーなどは毛の肉声をどこから集めたのだろうか。資料19点(および付録2点)の原典は次のとおりである。

4種類の『学習文選』(出版社、出版地不明、あるものは1967年刊)

9種類の『毛沢東思想万歳』(出版社、出版地不明、あるものは1967年刊)

4種類の『学習資料』(出版社、出版地、出版年不明)

1種類の『毛主席革命路線万歳—党内两条路線闘争大事記(1921—1969)』

5冊の『毛沢東哲学思想教学参考資料』(北京大学哲学系編、毛沢東哲学思想教研室印)

編者は、ハーバード大学が集めた以上23冊の

『新しい毛沢東文献』から19件の資料を選び、厳密なテキストクリティークを行った上で収録したという。編者のT. チークは、文化大革命期に編まれたこれらの資料がはたして信頼できるのかと問いながら、胡華の言葉「あの連中（紅衛兵）は個人崇拜をしている、だから手直しをしないで印刷した筈だ」を借りて、「テキストそれ自体は信頼できる記録だと信ずる」と述べている。

(三)

本書の庄巻は57年2月の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」である。反右派闘争への暗転と同時に発表された修正版しか知らないわれわれには、オリジナルがどうだったのかは反右派闘争の性格にからむだけに、重大な関心事だった。「私の一生でこのときほど嬉しくなり、奮い立ったことはない。……中国の歴史に新しい紀元がやってくるような感じがした」と若き黨員ジャーナリスト劉賓雁を感激させ、後には「人類史上最大の政治的ベテン」と歯ざしりさせた（『劉賓雁自伝』）毛沢東の演説とは、本当はどうだったのだろうか。

期待にたがわず、本書のオリジナル版（ただこの講話は、6月19日の公表まで、毛沢東が一五回も手を入れており、本書のものが真のオリジナルかどうかは確定できない）は、公式のものと比べて格段に面白い。趣旨が大きく変わったこともある。第7稿（5月24日）では『修正主義は一種のブルジョア思潮だ』と書き換えられ、第8稿（5月25日）では「香花と毒草を見分ける6つの政治基準」（鄧小平の「4つの基本原則」の原型）が入り、「階級闘争はまだ終わっていない」と挿入されたと言う（施肇城「“关于正确处理人民内部矛盾的问题”重要理论观点的修改始末」『党的文献』1991年第二号）。

だがそれ以上に毛沢東のナマの声（粗野とさえ言える）が聞こえてくる。毛は言う、「（反革命

粛清の時）全部で何人殺したのか。70万人を殺した。そしてその後、おおよそ7万人を殺した。

（人は批判するが）あの連中を殺さなかったら、人民は頭を上げることはできなかった」、あるいは、「私は無政府主義を信じたことがある。はぁ。あの無政府主義とは大変にいいものだ。またカントの唯心論を信じたことがある。……マルクス主義は後になってやっと潜り込んできて、私の頭のなかをちょっと変えただけである」。また「スターリンは、七分はマルクス主義者だが、三分はマルクス主義者ではなかった。三分のブルジョア階級、七分のマルクス主義だった」と、毛の言葉はあくまで奔放で辛辣だ。

(四)

翻訳は、基本的には中国語テキストを底本にしたと言うが、非常に丹念で厳密なように見受けた。ただ、正確を期するあまりかけっして読みやすくない。資料集の翻訳、とくに本書のような話し言葉（しかも、「親密な戦友」林彪でさえ聞き取れなかったという毛沢東の湖南弁）の資料の翻訳は非常な難行だったにちがいない。訳者たちの労と熱意に深い敬意を払いたい。

最後に注文がある。一つは、原書の解説部分の一つにまとめて欲しかった。邦訳版で上下巻に分割する理由は何だろうか。もう一つは、23の新テキストと19点の新資料について、巻初に簡明な、分かりやすい解説がほしかった。あまりに専門家向けの構成、文章になっていて、読者にはけっして親切ではない。

訳者の徳田氏も言うように、本書はいま刊行中の『建国以来毛沢東文稿』とともに、現代中国研究に重大な新しい手掛りを与えてくれる。

（上巻1992年9月刊、368頁、5400円・下巻1993年2月刊、350頁、5200円）